# AFC Forum フォーラム 6·7

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

2020 合併号

短期集中3回連載「SDGs、その役割を問う」最終回

## 特集 自然資本の経済はじまる

# 観天望気

## オーガニックは不可能じゃない

日本においてオーガニック農業（以下、オーガニック）は、長きにわたり「無農薬で安全」という形で矮小化されてきた。この誤解ともいえる認識が広く浸透しすぎて、もはや修正困難になっているが、ここではあえてオーガニックの原点をひも解いてみたい。

オーガニックには、多様な考え方が存在するが、原点は「自然循環機能の活用」である。具体的には、自然界の物質循環と人間活動との調和をゴールとしている。ゆえに、循環しないものは使用しない（ように心掛ける）。たとえ農薬が人畜無害でも、循環になじまないものであれば使用を避ける。化学肥料も同様。いうなれば、生態系目線で人間の生産活動を見直し、自然循環機能を活用する方法へと切り替えていくのがオーガニックである。

一つ、わかりやすい例を挙げておく。オーガニックの伝統的な技術に「踏み込み温床」と呼ばれるものがある。秋に集めた落ち葉と米ぬかを洋菓子のミルフィーユのように積み上げ、その発酵熱を使って寒い時期の育苗をおこなう。

通常の育苗では熱源に化石燃料を使うので、循環しないばかりか大量の温室効果ガスを排出する。これに対し踏み込み温床は、使用後の落ち葉と米ぬかを田畑に戻すことができる。温室効果ガスはゼロではないが、化石燃料に比べればはるかに少ない。

昔の日本人は、身近な資源の活用術に長けていた。しかし、手間暇がかかるという理由で敬遠され、技術の多くは忘却のかなたへ押しやられた。

いま世界に目を向けると、ほとんどの国や地域で自然環境が危機に瀕している。自然環境の劣化は社会環境の悪化を招く。そこで国連がSDGsを打ち出したわけだが、ここでもオーガニックは大きな可能性を秘めている。

いまこそ、自然の循環機能に目を向けよう。オーガニックは決して不可能ではない。ヒントは、先人たちの知恵の中にある。

特定非営利活動法人日本オーガニック＆ナチュラルフーズ協会（JONA）理事長

**高橋 勉**

たかはし つとむ

1967年埼玉県生まれ。92年の地球サミットを機に環境運動に参画。その後、オーガニック農家での下積みを経て、2000年よりJONAで検査員兼事務局員として勤務。世界各地のオーガニック農場を検査してきた。11年より現職。地域風土に根ざしたオーガニックの普及をめざす。